

食を通して、よりよく生きようとする児童の育成  
～食について知り、考えたことを、実生活に「生かす」意識を大切に～

本校では、令和2年度から学校努力点のテーマを「食を通して、よりよく生きようとする児童の育成」とし、食育に重点を置いた実践研究を進めています。

「食べることは生きること」という言葉がある通り、食の質は、生活そのものの質を大きく左右するものと言っても過言ではありません。しかし、児童たちの食を大切にしようとする意識は決して高くはありませんでした。児童たち自身が食に主体的に向き合い、食を通してよりよく生きる力を身に付けてほしいと考え、このテーマを設定しました。児童たち自身が自分の食について向き合う、「主体的な給食」への転換を目指したのです。主体的な給食とは、一人一人が、自分なりの根拠を基にして喫食の量や給食時間中の振る舞いを考え、判断し、調整することができる姿が見られる給食です。その実現のために、以下の2つに重点を置いた食育を進めてきました。

- ① 知る食育……自分にとって適切な給食の分量や栄養素のバランス、食べ合わせなど、身近な食についての知識を深める。
- ② 考える食育…学んだことを基に自分の食を振り返り、それをよりよくしていくための具体的な方法を考える。

喫食の量や給食時間中の振る舞いを考え、判断し、調整するために不可欠なのが、食に関する「知識」です。そこで令和2年度は、「① 知る食育」によって、発達段階に応じた食の知識を獲得させ、「主体的な給食」のための基盤を作ることをねらいました。その上で、「② 考える食育」として、自分の普段の食（ここでは特に給食）を振り返らせ、給食の時間を、自分にとってよりよいものにしていくための方法を考えさせました。

発達段階や学習内容との関連を考慮し、各学年での「知る食育」「考える食育」を体系化したことで、食に対する知識を深め、それを基に主体的に食べようとする児童を育てることができました。

ただ、食育の必要性を感じづらい子がいたことや、授業実践で高まった意欲を継続していくことについては課題が残りました。

そこで、令和3年度は、令和2年度の実践を基盤としつつ、その成果と課題を踏まえて、食に関する知識や、それを基に自分の食に対して考えたことを「発信すること」に重点を置いて取り組みました。単元の終末で他者に対して発信する学習活動を設定し、単元の冒頭から一貫して「発信」を意識させることで、学習への意欲を高めたり維持したりすることが期待できます。また、他者意識が生まれ、相手に分かりやすく伝えるために、より深く知り、考えようという、主体的に学ぶことができるのではないかと考えました。家庭への情報発信にも引き続き重点を置き、保護者の皆さんと連携しながら、目指す姿に迫りました。

各学年が、発達段階や実態に応じて、手紙、校内放送、校内テレビ放送、タブレットでの動画配信、新聞等、様々な方法での「発信」を行ったことで、児童たち一人一人が自分なりに工夫して学習に取り組む姿が見られ、食育の学習がより一層「自分事」(＝主体的な学び)となったと感じました。さらに、他学年の食育を受信する機会も増え、各学年の学びを学校全体に波及させることができたのも、大きな成果であると言えます。

一方で、学習したことが、児童の実生活に十分に生かされているとは言えない状況に、課題があると感じました。年度末に行った児童へのアンケートでは、「自分の健康を考えてバランス良く食べている」の質問に対して「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」と回答した児童は57%にとどまりました。保護者アンケートでは、「お子さんが食育で学んだことを家庭での食事に取り入れている」「食育の取り組みが始まってから、お子さんの食に対する意識が変わった」の質問に対して、「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」と答えた保護者は、それぞれ、57%、59%にとどまりました。令和4年度は、それぞれの回答を70%以上に引き上げていきたいと考えています。

そこで、令和4年度は、昨年度の成果と課題を踏まえて、食に関する知識や、それを基に自分の食に対して考えたことを「実生活に生かすこと」に重点を置きたいと考えています。具体的には、食育で学んだことを、生活のどのような場面で、どのように生かしていきたいかを考える学習を、単元の中に設定します。児童一人一人が行動目標を定め、家庭の協力を得ながら取り組み、事後には振り返りを行うことで、児童たち自身が、食育で学んだことを生活に生かすことができたかを認知できるようにしていきます。また、学んだことを「発信」する際に、受け手からの感想や評価をもらうところまでを、学習計画の中に位置付けます。それにより、より主体的な食育が実現すると期待しています。

